

[7]教員文化とペダゴジー

比較教育社会史的に「教師の戦略」を考えるために

—松塚俊三・安原義仁編『国家・共同体・教師の戦略』（昭和堂、2006年）を読む

一橋大学 木村 元

教師の仕事は、国家や共同体の側から見るとそれらの担い手の形成であり、子どもの側から見るならばそうした社会をよりよくいきるための力量形成の助成に関わるものである。むろん実際にはこれらが交錯して表れるが、こうした3つの領域の中心にあって、次の世代形成を任された特別な大人として教師（社会的・制度的存在としての教員）の存在が位置づけられていると考える。教師はその意味でこの三者のあいだに立って、時として引き裂かれうる矛盾的な存在であるとも言える。その中を生きねばならない教師はどのようにその場を振る舞うのであろうか。こうした課題意識をもってこの本を読んだ。そこには、教師であるということによって背負わされる困難と、それぞれの社会や文化に起因する諸問題が存在するであろう。教師はそこでの諸課題に否応なく向き合わされるわけであり、それを乗り切る戦略を半ば無意識的に選び取ることになるのではないか。比較教育社会史という手法はどのようにしてこうした教師の戦略を検討の俎上に載せ、克服の対象とされた困難の質の解明にアプローチするのか、これが私の最も知りたかったところである。

著作全体の柱として、国家をもその一つとした「複数の公共性の対立と交渉の磁場」をもつ公共社会のなかで世代交代を担う教師の役割、さらに、教室での教師—生徒関係を越えた「互恵的な社会的関係」として教育を捉えることが示されている。戦略の立脚点の考察には欠かせない点だと思う。そこから必然的に、教育を対子ども・家族関係だけで押さえるのではなく、教師の社会へ関わりがそのまま教育の〈教える—学ぶ〉関係を規定するという視点も導かれるようになってきていると思われた。

実際には、国家と共同体のはざまでの教師はどう描かれたのか。教師の戦略として共通していたのは、広範囲にわたる共同体の政治文化の担い手としての教師である。教えることを成り立たせるためにどのように地域とのつながるのか。指摘されているように、葬儀、相談役、遺書の代筆、譲渡証書、請願の写しなど様々な相互扶助的な役割を果しながら信頼の調達がはかられていたであろう。メキシコの極端な中央集権的な教育振興政策は、こうした教師たちが抱えた矛盾を浮きぼりにする格好な素材である。中央から派遣され、国家の意図を体現しようとするが、そのためには、国家の使徒としての役割を「ずらし」ながら、農村地域の「生活向上」を媒介する必要があった。時には命すら賭するそこでの「工夫」はどのようなものであったか。この点の解明は重要な課題であると思う。

一方で、戦略を形成した教師（教師になっていくもの）の日常世界と心性が、手紙、日記資料などを駆使して明らかにされようとした。たとえば、アメリカの公教育成立期の女性教師の心性の検討がなされている。今日のアメリカの教師文化（教師文化か教員文化かは議論の余地がある）としての指摘される、使命感を持った市民養成への献身、子どもへの愛や忍耐、道徳教育など諸特徴の起源を見出そうとした。教員文化を支える諸特性が、

近代学校制度の普及期、教職の女性化が進行と平行して築かれていった点は、女性・教員文化・近代学校の構築という連関を提示してくれている。アメリカの社会のなかでの教師へのまなざしを浮き挙げようとしているが、それは20年代以降に女性化が進む日本のそれとはどういう違いがあるか。検討課題を得た。

さらに、教師の戦略に対置される人々の側にある独学の文化にも焦点があてられている。もちろんここでも単純な対置ではなく、序で示された教えることと学ぶことのマクロな社会的な双方向性を意識した叙述となっている。自己教育を越える文化的識字、手紙を書く行為の持つ意味等々もこうした文脈に位置づけられよう。

ところで、この著では、「変転きわまりない政策に翻弄されてきた」教師(p3)として押さえがある。この「翻弄」について考えてみたいと思った。教師は単に外から翻弄されてきただけの対象だったのか。私はそうした角度への批判から日本の教師について検討したいと思ってきた。案外、独自の日本の教員文化のなかで政策の内容をズラしたり組み替えたりして今日にいたっているとも考えられないか。独特な振る舞いでこれをかわしてきたのではないかということである。こうした教師が作り上げてきた独特なバイアスをここでは教員文化における防衛機能として押さえおきたい。日本の教員文化の特質として、<国家の教師>という社会的な位置、仕事の無限定性、子どもへの献身性を仲立ちとした徳性の強調などが挙げられよう。こうした教員文化は他の社会ではどのような特色をもっているのか。特に私はそれが持つ宗教性に根ざす教師—子ども関係に関わる問題に関心がある。日本の教員文化を支えているとしてあげられる諸点はそれぞれについては他の諸国・地域でも形式上はみられることはある。しかし例えば教師—子ども関係がもつ独特な保護—服従の関係は特別な文化に根ざすもののように思える。私は以前、日本の教師が新しい大量の子どもが学校に来るようになる時期に戦略として子どもを抱え込む教え子主義があるということを指摘したことがあるが、そこには日本の子ども観が前提にあると思われるし、それを支える宗教的な心性ともいえるものが窺われる。そうした関係についての比較史研究ができないかと思っている。因みにこの著ではアジアが挙げられていないのが残念だった。私たちが比較しているのは欧米と日本なのか。それとも東アジアなのか。この点が深められることは欠かせない課題と思われたのは私だけではあるまい。

これも含めて、教師の戦略をいうときには、外側の社会と戦略的に向かい合いつつ内に対してはそれをどう展開させて対応するのか。本書の研究はその前者の面に焦点を当てた研究であったが、その内回り(ペダゴジー)の検討と合わさって教育社会史研究としての深みをますことになるであろうと思う。